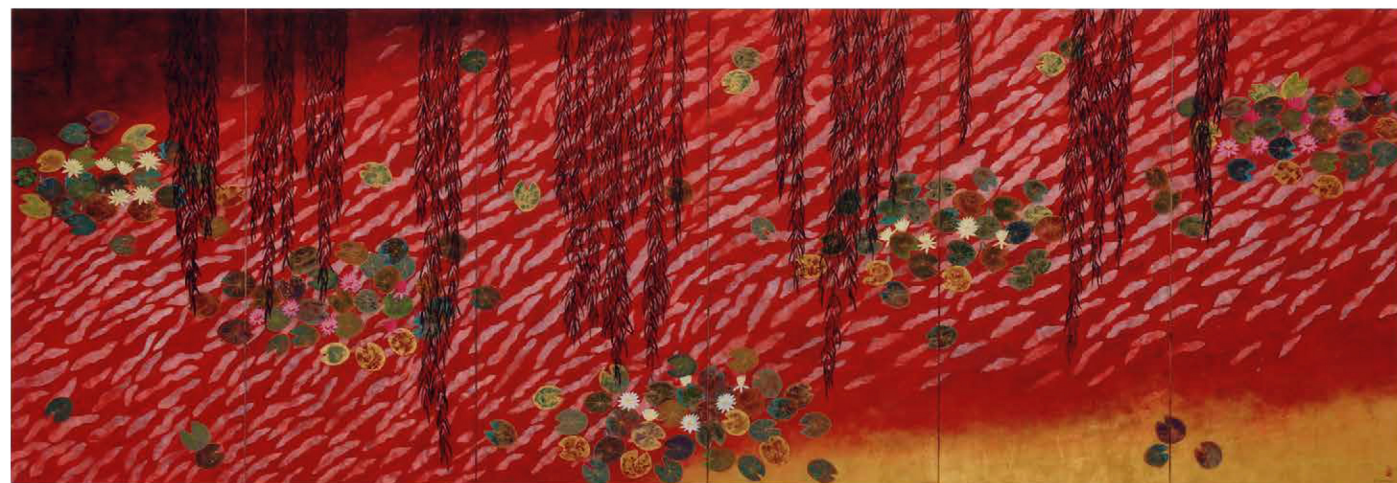


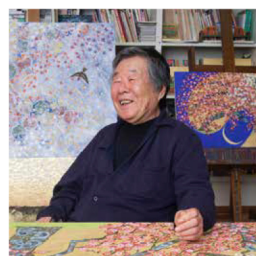
# 印象派の本場フランスで賞賛止まぬ 平松礼二の“日本画”ジャポニスム



平松礼二《モネの池に夕の雲映る》

文/ヴァネッサ・ルコント(ジヴェルニー公立印象派美術館・学芸担当)

モネがこよなく愛し、終の棲家にしたジヴェルニー。セーヌ河の流れるこの自然豊かな地に、印象派の歴史を見つめながらその現代性を追求する「ジヴェルニー公立印象派美術館」がある。そしてここには、画業60年を迎える日本画家・平松礼二の作品が数十点も所蔵されている。25年近く、モネの足取りを探索し続けてきた氏のジャポニスム・シリーズは、様式も技法も真正正銘の日本画。印象派に影響された絵が溢れるなか、一体なぜ平松絵画がフランス人の目に留まり、彼らを魅了したのか。現地学芸員が分析する。



平松礼二 ひらまつ れいじ  
Profile

1941年東京都生まれ。77年創画展に初入選後、88年まで出品、以降は無所属として個展を中心に活動。94年～2005年、多摩美術大学教授。2000年～10年、月刊「文藝春秋」の表紙絵を担当。山種美術館賞大賞、MOA美術館岡田茂吉賞優秀賞の他受賞多数。13年、ジヴェルニー公立印象派美術館で個展を開催、翌年、ベルリン国立アジア美術館に巡回。17年、町立湯河原美術館名誉館長就任。

2013年の「水」をテーマにした大がかりな「ノルマンディー印象派フェスティバル」のプログラムの一環で、ジヴェルニー公立印象派美術館での第2弾の企画展として、日本人画家、平松礼二の「平松礼二・睡蓮の池・モネへのオマージュ」展が開催され、初めてその作品がフランスで紹介されました。この機会にまだ若い私たちの美術館のコレクションはより豊かなものになり、再び、今回の「ジヴェルニーで平松礼二」展が実現したのです。平松がパリのオランジュリー美術館でクロード・モネの《睡蓮》の大壁画に出会ったのは1994年で、その時の感想を次のように話しています。

そして、その答えを見つけたら、ジヴェルニーに行く決心をしたのです。そして、ジヴェルニーを訪れ、モネの庭の池の周りを何度もめぐっている時、突然、モネは、池の姿を、江戸時代に日本の女性が愛用した手鏡に似せて設計したのではないかという考えが閃きました。以後、現在に至るまでの25年間、平松は、何度も飽くことなくジヴェルニーの地へ戻って来ました。フランス人画家であるモネの作品をもっと理解したいと、ジヴェルニーで四季折々の庭を歩き回り、そこでスケッチした沢山のデッサンをアトリエへ持ち帰りました。これらの、水の風景、その水の反射、きらめきは、画家の大切なモチーフとなり、また、モネが1907年と1908年に用いた円形フォーマット（睡蓮）1908年、ダラス美術館蔵、他）も採用しています。1909年に、美術評論家ロジェ・マルクスは、変化してゆくモネの作品を次のように分析しています。

右／3月30日からジヴェルニー公立印象派美術館で開催中の「ジヴェルニーで平松礼二」展の展示風景。左／展覧会会場入り口。



「もはや、地面も、空も、境界もない。眠ったような豊かな水のうねりが、カンヴァスの面を覆い尽くしている。溢れる光が青緑色の浮葉でおおわれた水面に、戯れるようにふりこぼれている。その中に睡蓮が見事な姿を現わす。白やバラ色、クリーム色の花冠が、大気を、太陽を求めて空高く伸びている。」

ここで画家は、西洋絵画の伝統から離れ、ピラミッド型の構図線や一消失点の追求をやめている。そのような固定されたものや不変さは、彼にとっては、自然の本質であるうつろいやすさとは矛盾すると思えた。彼は、注意をあらゆる方向に拡散させることを望んだのである。

平松にもモネの作品展開のような冒険が見られます。

平松は制作を通して、絶えずモネの作品と対話をするのです。このアーティスト二人の間に共通する点について、画家自身は次のようにまとめます。

(1) 光を受けて鮮やかに発生する多様な自然や生命の輝きを、色彩を駆使して表現。(2) 自然界に自己の希望と理想を託し、創造性をもって展開し、モチーフに対する革新力を持つ。自然と人間の創造性の調和の中に、独自の風景画を創出したパイオニア。

平松は、モネの大壁画の他にも強い印象を与えられた作品として、睡蓮の池をモチーフにした作品のほか、《アンティープ岬》1888年(愛媛県美術館蔵)、《積み藁・晩夏》1890〜91年(オルセー美術館蔵)、《エプト河畔のポプラ並木》1891年(フ

イデラルフィア美術館蔵)、《サンリッザール駅》1877年(オルセー美術館蔵)、《ジヴェルニーのポプラ並木》1887年(ニューヨーク近代美術館蔵)、《日本の橋》1918〜24年(マルモッタタン・モネ美術館蔵)《藤セル・ドッサル美術館蔵》をあげています。平松のモネへの敬愛の念は、彼を何度もルーアンや、オンフルール、エトルタ、フエカン、ドーヴィル、トゥルーヴィルといったノルマンディー海岸へと導いています。このジャポニスムへの旅を、彼は、次のように表現しています。

「クロード・モネの睡蓮の超大作のシリーズを観て愕然とした。一念発起して『印象派・ジャポニスムへの旅』という日本画家の眼による『ジャポニスム研究』を始めた。究極の目的は、ジヴェルニーにあるモネの庭園で『ジャポニスム』を探求すること。少年時代から日本の美への憧れをいだき続けたモネ、彼が『ジャポニスム』になぜそこまで惹かれたのかを理解したい、そしてモネの眼というものを探りたい。」

このように、平松はモネを通して「ジャポニスム探求」に辿り着いています。また、自身の最も尊敬する浮世絵師、葛飾北斎について次のように語っています。

「北斎の浮世絵には装飾性・様式美・遊び心、鮮やかな色彩という日本人固有の美意識がすべて含まれていると思う。日本の春、夏、秋、冬の4つの季節を通しての自然の恵みを感じつつ受け入れ、それらを素直に絵画として表現している。彼の画面構成は天才的である。『赤富士』(凱風快晴図)の

富士山と白雲は、画面の右側に富士山を寄せ、残った空間に棚引く白雲を描く。その他には何も無いという、大胆で奇抜、明快な構図で圧倒的なスケール感がある。」

そしてモネ自身の、素晴らしい浮世絵コレクションの一つでもある葛飾北斎の代表作《神奈川沖浪裏》について述べています。「左側に寄せる大波を配置し、遠くに富士山を描き、この作品にも日本人に共通する美意識がふんだんに含まれている。それを僅かな色数で簡潔乍ら遠近を生みだしている。北斎の一番好きなのは、画面全体をきれいにまとめる細い線、目前や胸中にある対象を超えて宇宙の彼方まで描き切るような鋭さをもつ。それは恐ろしさでもあり、私は北斎から日本美の特質を学び自作の源としている。」

このように、平松によるモネの作品探求は、まさに、「印象派とジャポニスム」の架け橋となっています。(円山和子訳)

Information

「ジヴェルニーで平松礼二」展

会期……開催中～2018年11月4日  
会場……ジヴェルニー公立印象派美術館  
99 rue Claude Monet,  
27620 Giverny, France  
Tel. +33 (0) 2 32 51 94 65

参考文献:「平松礼二-睡蓮の池-モネへのオマージュ」(ジヴェルニー公立印象派美術館) ロジェ・マルクス「クロード・モネの睡蓮」(ガゼット・デ・ボザール) 所収) 平松礼二『睡蓮-ジャポニスムII』(美術年鑑社)